

准看護師養成校における社会人学生の仕事に対する思い

—介護職経験者の学習プロセスの分析から—

宮上多加子¹・田中 眞希²

(2015年9月30日受付, 2015年12月17日受理)

Adult Assistant Nursing Students' Views about Their Prospective Career :

Care Work Experience Learning Process

Takako MIYAUE¹, Maki TANAKA²

(Received : September 30, 2015, Accepted : December 17, 2015)

要 旨

近年, 他分野での職業経験をもつ社会人が専門職養成教育を受けて資格取得をめざす例が増加している。本研究では, 社会人の再教育の事例として准看護師養成を取り上げ, 介護職としての職業経験を持つ学生20人に対して面接調査を実施した。逐語録から抽出された82コードをもとに18カテゴリーを生成して相互の関係を検討した結果, 養成校における学習プロセスは, 5つの局面として整理できた。

考察にあたっては, コルブ (Kolb) の経験学習論に基づき, 学習プロセスと仕事についての信念の変容について検討した。准看護学生は, 「福祉職から看護職への転職」「看護を実践的に学び始める」「自分自身と看護師像を重ねていく」「看護について仕事の信念をもつ」という局面を経る中で, 仕事についての信念を固めつつ, 将来のキャリアを描こうとしていた。

キーワード: 准看護師, 生涯学習, 経験学習論, 人材養成, 仕事の信念

Abstract

There are increasing numbers of adults with work experience in other fields seeking specialist education to achieve licentiate status. We reviewed the assistant nurse training as an example of an adult re-education program, and interviewed 20 assistant nursing students who had care work experience.

In total, we obtained 82 codes, which were consolidated into 18 categories. We found there were five specific aspects to the learning process in the education program, and used Kolb's experiential learning theory to discuss changes in the learning process and beliefs about assistant nursing.

Assistant nursing students developed their belief in their job, and tried to plan their career using the identified aspects: "changing career from a caring job to a nursing job," "beginning to learn about nursing in a practical manner," "seeing themselves in a nurse model," and "holding beliefs for a nursing job."

Key Words : Assistant nurse, Lifelong learning, Experiential learning theory, Human resource training, Beliefs for their job

1 高知県立大学 社会福祉学部 社会福祉学科・教授・博士 (社会福祉学)

Department of Social Welfare, Faculty of Social Welfare, University of Kochi, Professor (Ph.D.)

2 高知県立大学 社会福祉学部 社会福祉学科・助教・修士 (社会福祉学)

Department of Social Welfare, Faculty of Social Welfare, University of Kochi, Assistant Professor (Master of Social Welfare)

I 研究の背景

超高齢社会においてケアニーズが増大していく中で、ケアに従事する人材の需給バランスが崩れ、福祉や医療の現場は慢性的な人手不足に陥っている。人材養成に関しては、若年人口の減少や福祉職の雇用・労働条件の厳しさ等から、介護福祉分野の教育機関では定員割れが続いている。しかし、近年の雇用情勢の悪化を背景に、離職者に対する就業支援策が実施されたこともあり、介護福祉士養成校で社会人学生が急増しているという変化がある（宮上2012）。また、田中らの調査によると、介護福祉士等の資格保持者が准看護師養成校に入学しているという実態もある（田中・宮上 2015）。

このように、福祉・医療の分野では、人材が職種や分野を超えて流動化している状況が見られるが、学習者の立場からみると、「社会人の学び直し」の機会が増大していると捉えることができる。今後もこのような状況は継続すると予想され、多様な背景を持つ社会人の学習者に対して、職業経験や社会経験を活用したキャリア支援について検討していく必要がある。

II キャリアと経験学習論

生涯学習に関する理論の中で、人間が経験からどのように学んでいくのか、またその中で学習者の認識がどのように変化していくのかについて、そのメカニズムを明らかにする研究は経験学習論や変容的学習理論としてまとめられている。谷口（2006）は、キャリアという概念と学習との関係を整理しているが、経験学習理論については、Lewin, Dewey, Piaget, Kolb, Jarvis, Mezirowの理論を解説している。このうち、Kolbは、経験学習を4つの要素からなるサイクルとしてモデル化しており、同時にこのサイクルが生涯継続していくとして、らせん型の経験学習プロセスモデルを紹介している（谷口 2006:108）。また、松尾（2006）は、Kolbの経験学習論のモデルを参考として実証研究を行い、IT技術者や企業の営業職が熟達者に至る経験学習プロセスを明らかにして

いる。その中で、仕事に対する価値観や職務上で大切にしていることを「仕事の信念」と表現し、これが人の行動や態度を方向づけ、経験を意味づける働きをすることで、その重要性を強調している。

成人教育学においては、学習者の経験は自他の学習資源としての価値を持つとされ、Kolbの経験学習論においても経験によって獲得された概念が新たな学習によって修正・再形成されることが示されている。一方で、福祉・医療現場における職業経験の意味づけに関しては、一般に「現場で学ぶ」という価値観が存在している。しかし、経験から何をどのように学んでいくのか、またその過程において学習者の経験と新たな経験はどのように結び付いていくのかについて、実証的な研究の蓄積が少ない。高齢化の進展や雇用の不安定化に伴って、成人期に複数の職業を経験することが通常となっている現代社会において、他分野から移入した福祉・医療職が経験から学んでいく様相を明らかにすることは、職業人としての生涯学習を推進する資料となると同時に、提供されるケアの質向上や人材確保の方策に寄与すると考えられる。

人が職業経験を通して自己像を確立していくプロセスを表す概念としては「キャリア」がある。しかし、介護福祉分野では「キャリア」という概念はあまり浸透しておらず、そのために研究の蓄積も少ない。その理由として、横山（2011）が述べているように、厚生労働省から介護職員のキャリアパスの枠組みが示されたのは2010年であり、2011年には『今後の介護人材養成の在り方に関する検討会報告書』の中でキャリアパスのモデルが示されているものの、実体としてのモデルは構築されておらず、介護職員の働き方や意識とは乖離があるかもしれない。

筆者らは、介護福祉を学ぶ社会人学生の経験や介護についての認識を調査し（宮上・田中 2013）、また介護福祉士への調査データを加えて、仕事や人に関する思いが質的に変化していくことを確認

した（宮上・田中2014, 宮上・田中2015）。また、医療分野の専門職養成教育に関する研究動向について、国立情報学研究所の論文検索データベースであるCiNiiを用いて、「看護師」と「学生」をキーワードとして検索したところ、ヒット数は915件であった（2015.9.11実施）。これに対して、「准看護師」と「学生」をキーワードとした結果は、ヒット数17件であり、そのうち過去10年間の准看護学生を対象とした論文数は、わずか2件（田中・宮上 2015, 河野 2014）であった。つまり、准看護学生を対象とした調査研究は、非常に少ないことがわかる。この背景には、看護学生に比べて准看護学生数が少ないことや、准看護師養成校から専門課程に進学して看護師免許を取得する学生の割合が高くなっていることがあると考えられる。

今回の研究では、人をケアする準専門職であり、介護福祉士と同じく2年間の養成期間である准看護師を調査対象としている。医療職である准看護師を取り上げた理由は、前述したように、福祉・医療現場での介護職経験の後に准看護師養成校に入学する社会人学生が増加している状況が確認されたためである。つまり、福祉分野から医療分野へと労働力の流出が起こっているため、その背景を探るとともに、仕事を行う分野や環境が変化することによって、仕事に対する意識がどのように変化するのかを明らかにしたい。

従って、本研究では、介護職から医療職に移行する際の入り口となっている准看護師養成校に在籍する社会人学生を対象として、看護や介護の仕事に関する意識やキャリアに関して、「仕事の信念」を手がかりとして分析を行うこととする。

Ⅲ 研究目的・方法

1. 研究の目的

研究目的は、准看護師養成校の社会人学生がもつ「仕事の信念」の内容とその変容過程を明らかにすることである。本研究では、人が経験から学んでいく過程において原動力の役割を果たすとさ

れる「仕事の信念」と、新たな経験が個人の中で意味づけされ、次の経験に向かうプロセスに着目する。介護職としての経験をもつ社会人学生が、何をどのように学び、同時に仕事の信念がどのように変化していくのかを質的記述的な分析手法を用いて明らかにする。

2. 研究方法

本研究は、学習体験について准看護師養成校の学生の立場から検討することを目的としていること、またこの研究テーマに関する先行研究が少なく、適切な理論や仮説が提示されていないことから、質的帰納的なアプローチを用いた。具体的な手順としては、福祉・医療現場での就業経験を経た後に准看護師養成校に入学した社会人学生を対象として個別面接調査を実施し、逐語録を作成した。その後、質的分析ソフトMAXqdaを使用し、佐藤（2008）が提唱している分析方法を参考として、語られた内容を比較検討しながら抽象化作業をすすめ、コードからカテゴリーを生成した。

質的調査方法におけるデータの厳密性を高め、分析結果をより確かなものとするために、以下の2つを行った。確実性（credibility）を高めるための協力者への再確認（メンバーチェック）については、カテゴリーを生成した時点で、調査対象者全員に対して結果を文書で報告し、自身の経験に照らして納得できるかどうかについて参考意見を聴取し、分析結果は支持された。また、確証性（confirmability）を確保するために、看護・介護福祉教育に携わっている教員を含めた自主研究会で結果について協議し、データの解釈や社会人を対象とした教育の現状についてディスカッションを行い合意を得た。

3. 対象者の選定と倫理的配慮

調査対象者の選定手続きについては、四国内にある2県の准看護師養成校4校の教務担当教員を通して行った。あらかじめ年齢・性別・職業経験・学習意欲等についての条件を提示したうえで、偏

りがないよう調査候補者の推薦を依頼した。調査候補者に対して、研究者から研究内容と倫理的配慮についての説明を文書および口頭で行い、了解を得たうえで研究参加への同意書に署名を依頼し

承諾を得た。なお、調査開始前には、本学の研究倫理審査委員会に申請して承認を得ている（第322号：2013年7月22日付，第384号：2014年6月24日付）。

表1 調査対象者一覧

	学年	性別	年齢	学歴/職業歴	介護職場・経験年数	介護資格	
1	1年	男性	30歳代	高校中退/建設業, 介護職	グループホーム	6年	訪問介護員
2	1年	女性	30歳代	短大卒/事務職, 病院等	療養病床, 老人保健施設	7年	介護福祉士
3	2年	女性	30歳代	短大卒/事務職, 医療事務, 病院	病院	3年	介護福祉士
4	1年	女性	30歳代	短大/歯科衛生士, 介護職	グループホーム	3年	なし
5	1年	女性	30歳代	短大/一般企業, 介護職	デイサービス	4年	なし
6	1年	女性	40歳代	高卒/ホテル, 喫茶店, 介護職	訪問介護	2年	訪問介護員
7	2年	男性	40歳代	高卒/留学, 一般企業, 自営業, 介護職	有料老人ホーム	3年	訪問介護員
8	2年	女性	30歳代	専門学校(介護)/医療機関	医療機関	10年	介護福祉士
9	2年	男性	20歳代	専門学校(介護)/病院・老人保健施設	療養病床, 老人保健施設	7.5年	介護福祉士
10	1年	女性	20歳代	不明/サービス業, 介護職	グループホーム	3年	訪問介護員
11	1年	女性	30歳代	高卒/サービス業, 看護助手	病院	2年	なし
12	2年	女性	30歳代	高卒/家事手伝い, 看護助手	病院	6年	なし
13	2年	女性	20歳代	大卒/看護助手	病院	1年	なし
14	1年	男性	30歳代	大学院卒/公務員, 看護助手	病院	1年	なし
15	2年	女性	20歳代	専門学校(介護)/特別養護老人ホーム	特別養護老人ホーム	2年	介護福祉士
16	1年	女性	20歳代	専門学校(介護)/老人保健施設	老人保健施設	5年	介護福祉士
17	1年	男性	20歳代	専門学校(介護)/病院	通所リハビリテーション, 病院	8年	介護福祉士
18	2年	男性	20歳代	大卒/派遣, 介護職	特別養護老人ホーム, 老人保健施設	2年	訪問介護員
19	1年	女性	30歳代	高卒/訪問介護, 看護助手	訪問介護, デイサービス, 病院	4年	訪問介護員
20	2年	女性	40歳代	短大卒/特別養護老人ホーム, 専業主婦, 介護職	特別養護老人ホーム, デイサービス	10年	介護福祉士

IV 結果

1. 調査実施期間

個別面接調査は2013年～2014年にかけて実施した。調査実施期間は、2013年度調査は9月13日～12月18日、2014年度調査は9月27日～11月17日であった。

2. 調査対象者の概要

2年間で調査を行った対象者は全部で20人であった。調査時点の学年は、1年生10人、2年生10人であった。また、性別では男性6人、女性14人であり、年代別では20歳代7人、30歳代10人、40歳代3人となっている（表1）。

3. コードおよびカテゴリー

本研究における分析テーマは「看護の仕事に対する信念とその変化」とし、逐語録の中からテーマに沿って該当箇所を取り出してコード化を行い、コード相互の関係を検討しながらカテゴリー化を行った。データから生成されたコードは82、カテゴリーは18であった（表2）。

谷口（2006：110）によると、Kolbの経験学習論は、「具体的経験（Concrete Experience）」「内省的観察（Reflective Observation）」「抽象的概念化（Abstract Conceptualization）」「能動的試み（Active Experimentation）」という4つの次元で示されており、サイクルを伴ったプロセスとして捉える点に特徴があるとしている。つまり、経験学習プロセスは、これらの4次元をサイクルとして辿りつつらせん状に継続していく過程として示されている。谷口によると、「内省的省察」においては、学習者は自分の新しい経験について多くの観点から観察し振り返る段階であり、次の「抽象的概念化」では、内省的観察をもとに論理的に正しいと認識する概念や見方を創造する。そして、「能動的試み」では、新しい状況においてこれらの概念や見方を活用すると説明している。この経験学習のプロセスに関する理論を参考に、本研究におけるカテゴリーの相互関係を検討して

整理すると、以下の5つの局面に分類できた。なお、文中ではカテゴリーを『 』、コードを‘ ’として表記している。

1) 局面Ⅰ：福祉職から看護職への転職

この局面には、『出来る業務の範囲を広げたい』『看護師という仕事の魅力』『給与や待遇のステップアップ』の3つのカテゴリーと12のコードが含まれている。

転職の理由としては、収入増加や自立の手段という経済的な側面もあるが、‘介護職は業務内容に制限があり、不甲斐無い気持ち’ ‘介護をやってみて看護の知識が必要だと感じた’ というように介護職には業務範囲の制限があり、自分が直接ケアできる仕事の範囲を広げることや、専門性について看護職に魅力を感じていたという声も多かった。

介護職であった社会人が准看護師養成校へ進学するという行動は、介護分野から「越境」して医療分野の勉強を一から始め、同時に職業人から学生という立場に戻るということであり、強い動機や覚悟が必要である。さらに、入学後は新しい経験を繰り返しつつ最終的に資格取得を目指すことになり、社会人学生の立場からすると「挑戦」であると捉えることができる。

2) 局面Ⅱ：看護を実践的に学び始める

この局面には、『社会人学生として越境しつつ学ぶ』『自身の知識や経験を学びに活用する』『経験により培った力を生かす』『実習を通して現場の看護を学ぶ』の4つのカテゴリーと16のコードが含まれている。

この局面は、准看護学校における講義や実習等を通して、看護師として必要な知識と技術を学んでいく過程である。社会人学生は、‘介護や仕事の知識を土台にして学ぶ’ ‘介護の基礎的な技術やコミュニケーションは現場で役立つ’ というコードに示されるように、自分の職業経験や知識が学習の場で活用できることに気づき、意図的にそれ

表2 カテゴリーとコード一覧

局面	カテゴリー	コード記号	コード	コードのある人数
I 福祉職から看護職への転職	出来る業務の範囲を広げたい	a-1	介護職は業務内容に制限があり、不甲斐無い気持ち	13
		a-2	介護をやってみて自分に援助職の適性があるとわかる	6
		a-3	介護をやってみて看護の知識が必要だと感じた	16
		a-4	高齢者の生活援助ではなく命を助けたい	2
	看護師という仕事の魅力	b-1	介護福祉士の資格が生かせない	1
		b-2	もともと看護師を目指す気持ちがあった	7
		b-3	身近にいた看護師の仕事に何となく魅かれた	6
		b-4	勤務先の同僚や家族から進学を勧められる	16
		b-5	看護師は介護福祉士の専門性を認めていなかった	2
	給与や待遇のステップアップ	c-1	将来の自立の手段として看護師を目指す	8
		c-2	看護師になることは自分のステップアップ	4
		c-3	介護職では将来的に給与面で不満	6
II 看護を実践的に学び始める	社会人学生として越境しつつ学ぶ	d-1	学校と仕事の両立がきつい	7
		d-2	自分の意識と責任で学校へ行く	5
		d-3	周囲の支えを感じて学校を続けられる	6
		e-1	社会人の経験があると自立支援などは頭に入りやすい	2
	自身の知識や経験を学びに活用する	e-2	基本的な知識がある分野は理解しやすい	5
		e-3	介護や仕事の知識を土台にして学ぶ	5
		e-4	医療機関の経験から病態が理解しやすい	2
		f-1	経験があると自分なりの介助方法や判断をしよう	16
	経験により培った力を生かす	f-2	介護の基礎的な技術やコミュニケーションは現場で役立つ	18
		f-3	社会人は冷静な判断をできることが強み	1
		f-4	介護の経験があると患者の変化に気づくことができる	1
		f-5	利用者に気遣いができることが自分の「武器」	1
		g-1	実習で体験しながら学ぶと理解しやすく記憶に残る	9
	実習を通して現場の看護を学ぶ	g-2	実習中は看護計画を立てることが大変	3
		g-3	患者の細かい情報は看護師よりも介護職が知っている	3
		g-4	実習病院における衝撃的な体験	5
		h-1	今の学びは後の人生の自信になると思う	2
	III 自分自身と看護師像を重ねていく	社会人の時期における学びの意義	h-2	今の時期に看護を勉強することに楽しさと満足
h-3			若い時期よりも勉強することに覚悟ができる	5
h-4			働くうえで人と人を調整する力が大事	2
i-1			学校で学ぶ患者へのケアと現場のやり方が違う	12
基本と現実のギャップへの対応		i-2	現場は教科書通りの手技とは違う	4
		i-3	意に沿わない現実反面教師として割り切る	6
		i-4	看護の現場は業務に追われている感じで患者に寄り添えない	8
		i-5	アルバイト先では自分の役割に疑問がわく	2
		j-1	看護の仕事をやれるという見通しがつく	4
実習生として学ぶことと立場を認識		j-2	社会人に対して現場の職員は後押ししてくれる	4
		j-3	アルバイト先の実習だと勤務のような感覚がある	2
		j-4	准看と正看の学生に対して現場の態度が違う	1
		j-5	看護師への質問の内容とタイミングに気を使う	1
		k-1	看護師の業務が理解できた	5
看護師としての意識と動き方を実感する	k-2	だんだんと看護師として患者をみるようになった	3	
	k-3	看護師としても患者のペースを尊重する姿勢をもつ	6	
	k-4	看護師として個々の患者に寄り添う姿勢をもつ	9	
	k-5	患者に対する姿勢を内省する	7	
	k-6	忙しい環境では判断力が大事	1	
	k-7	患者への関わり方と仕事のスピードの折り合い	3	
	l-1	看護は扱う情報量が多い知識と技術が必要	13	
IV 看護について仕事の信念をもつ	看護は多くの知識と技術が必要	l-2	看護は新しいことを一から学ぶイメージ	9
		l-3	基礎的医学的な知識を覚えるのが大変	14
		l-4	勉強や規則が厳しいので中途半端な気持ちでは続かない	4
		l-5	看護の考え方を患者に伝えるのが難しいと感じる	2
		l-6	医学的知識と看護が2年目でつながる	1
		m-1	勉強に面白さを感じて興味が出てきた	15
	看護の考え方や特徴が分かり意欲がわく	m-2	看護は病態から考えるので介護とは視点が違う	15
		m-3	根拠に基づいて考えることが重要	4
		n-1	正確な手技を身につけるためには基本を学んでおく	7
		n-2	命に係わる責任が重いので知識や手技を身につける	10
技術・手技を確実に身に付ける必要性	n-3	看護の理論や本質の理解よりも技術習得に重点を置く	12	
	n-4	看護師の手技が気になって注目した	2	
	n-5	看護技術をきちんと身につけられるか不安	2	
	n-6	領域によって異なる清潔不潔の扱いに戸惑い	2	
	o-1	技術は必要だがその基本は信頼関係	1	
	o-2	手技だけでなく尊厳を大事にしたい	1	
看護の理念や目的を意識する	o-3	患者に対して安心できる環境を提供する	1	
	o-4	忙しくても自分の気持ちを乱さないようにコントロールする	3	
	p-1	勤務先病院に対する義理と奨学金返済	5	
	p-2	一般科で経験を積んでから希望の科に移る	8	
V 将来のキャリアを描く	卒業直後に働く場の決定要因	p-3	卒業後は准看護師として就職	5
		p-4	将来的には老人看護やホスピスに興味がある	2
		q-1	最新の医療よりも人を助けることに意義を感じる	1
		q-2	看護師と介護福祉士のフラットな関係を目指したい	2
	介護・福祉と関係する分野で働きたい	q-3	福祉分野の経験のあるメリット	4
		q-4	介護職の経験から福祉分野で看護師をしたい	10
		r-1	正看取得後の進路選択に悩む	2
		r-2	進学して看護師資格を取得する人が多い	8
	進学して看護師資格を取得したい	r-3	看護師の資格取得の道を探る	20
		r-4	看護の世界では男性は正看の資格が必要	1
		r-5	社会人なので時間がかかっても働किながら資格を取る	3
		r-6	中途半端なのでもっと勉強を続けたい	3

らを活用したりしていた。しかし、‘経験があると自分なりの介助方法や判断をしてしまう’というように経験があることがマイナスに作用することもあり、臨床現場での経験は‘実習で体験しながら学ぶと理解しやすく記憶に残る’というように受け止められていることから、多くの学生にとって看護学の体系的なカリキュラムを学ぶことは、「新しい経験」として捉えられていた。

3) 局面Ⅲ：自分自身と看護師像を重ねていく

この局面には、『社会人の時期における学びの意義』『基本と現実のギャップへの対応』『実習生として学ぶことと立場を認識』『看護師としての意識と動き方を実感する』の4つのカテゴリと21のコードが含まれる。

社会人学生は、自分自身の職業を中心とした経験のつながり（キャリア）の中で、‘今の時期に看護を勉強することに楽しさと満足’若い時期よりも勉強することに覚悟ができる’というように、今の時期に専門職養成教育の中に身を投じたことの意義を感じていた。しかし、‘学校で学ぶ患者へのケアと現場のやり方が違う’と疑問を抱いたり、‘看護の現場は業務に追われている感じで患者に寄り添えない’と教科書の中の原理原則と現場の看護との相違について課題意識を持ったりもしていた。このような課題に対しては、‘看護師としても患者のペースを尊重する姿勢をもつ’‘看護師として個々の患者に寄り添う姿勢をもつ’というように自分なりの答えを見出したり、医療現場における専門職としての視点や動き方を身に付けていた。

さらに、‘患者に対する姿勢を内省する’という行動は、養成校での学習や病院実習での自身の経験を振り返ることで、看護職としての具体的・現実的なイメージを描いていくということであり、この過程では「省察」を行うことが不可欠となる。つまり、これまでの職業経験からの知識や社会人としての経験によって、自分の学びの経験を多面的に検討し振り返りを行うことで、看護職として

の自己像を捉えようとしている段階であると言える。

4) 局面Ⅳ：看護についての仕事の信念を持つ

この局面には、『看護は多くの知識と技術が必要』『看護の考え方や特徴が分かり意欲がわく』『技術・手技を確実に身に付ける必要性』『看護の理念や目的を意識する』の4つのカテゴリと19のコードが含まれる。

看護職として仕事をしていく上で、大事にしたいことや仕事についての考えについては、‘命に係わる責任が重いので知識や手技を身につける’‘看護は病態から考えるので介護とは視点が違う’というように、「人の命を預かる」という責任感から、患者の安全と安楽のために必要となる知識や技術を確実に身に付けたいという意向が強かった。そのためには、‘看護は扱う情報量が多いし知識と技術が必要’‘正確な手技を身につけるためには基本を学んでおく’というように、基本的な知識技術の必要性を認識していた。また、‘看護の理論や本質の理解よりも技術習得に重点を置く’という学生が多い一方、‘手技だけでなく尊厳を大事にしたい’と語っている人もあり、看護実践の背景となる理念や目的についての意識は多様性があった。

この過程は、学校で学んだ看護の専門性や理念について自分の持つ価値観を通して「仕事の信念」として意識化していくプロセスと考えられ、看護という仕事の中に意義を見つけようとしていると言える。

5) 局面Ⅴ：将来のキャリアを描く

この局面には、『卒業直後に働く場の決定要因』『介護・福祉と関係する分野で働きたい』『進学して看護師資格を取得したい』の3つのカテゴリと14のコードが含まれる。

准看護師養成校を卒業した後は、そのまま進学して看護師資格取得を目指す学生が多いが、家庭の事情等から卒業後すぐに就職する学生もいる。

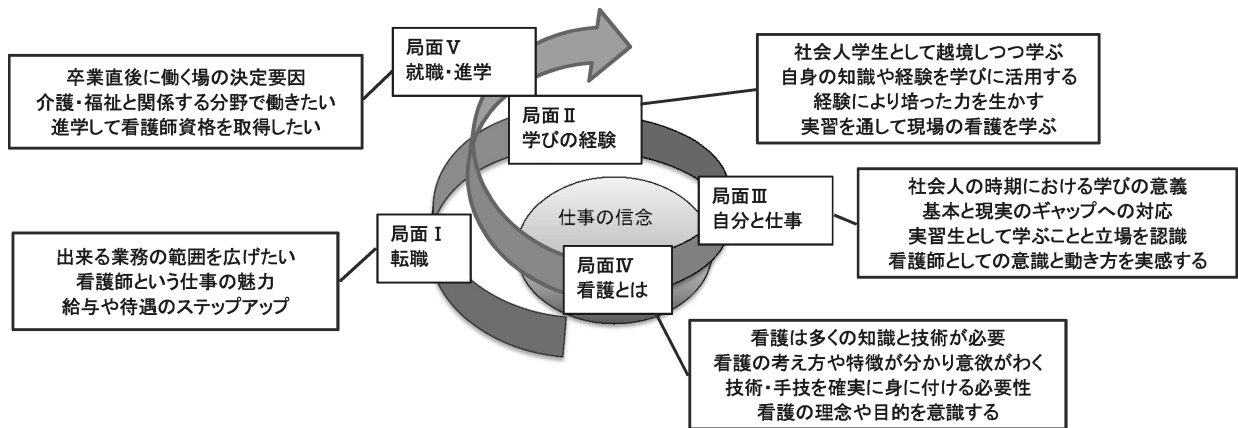


図1 准看護学生の経験学習のプロセス

希望する診療科や働き方に個人差があるものの、ほとんどの学生は具体的なビジョンを描いていた。また、‘介護職の経験から福祉分野で看護師をしたい’という学生も多く、自分の経験を活かすような連続的なキャリアを志向していた。

卒業後すぐに准看護師として働く、あるいは看護師資格を取得するために進学するといういずれの道を選択するにしても、新しい場での学びや新しい職場での仕事であり、学生にとっては再挑戦となる。

以上のように、5つの局面が連続している准看護師養成校で学ぶ社会人学生の学びの様相については、図1のようにらせん上のプロセスとして示すことができた。准看護学生の学びの様相の特徴は、①局面Iから局面Vまでが連続的なプロセスであること、②局面Iと局面Vが上下に重なり、らせん状に進行していくこと、③介護職としての経験があるために、「仕事の信念」はすでに形成されているが、看護を学ぶ過程で自らの仕事についての認識が再構成され、「仕事の信念」の中身が変化していると考えられることである。

V 考察

松尾(2006)は、Kolbの経験学習モデルを参考とした実証研究を行い、熟達者の経験学習プロセスを明らかにしている。松尾は、企業における熟達者の経験学習プロセスについて、「経験その

もの」「個人の特性」「組織特性」の3点から分析しているが、このうち個人の特性については信念という概念を用いて検討している(松尾2006:7-11)。そして、個人のもの見方や行動を方向づける信念は学習活動にも影響を及ぼすとして、職務を遂行する際に人々が持つ「仕事の信念」に着目している。松尾が述べている「仕事の信念」とは、仕事をする上で大事にしている考え方や価値観である。さらに、経験から学ぶ力の原動力として「思い」と「つながり」という2つのドライバーがあり、「思い」には自分への思いと他者への思いの2種類があるとしている(松尾2011:20-23)。そして、‘自分への思い’は、自分の目標を達成したい、周りの人から認められたい、プロとしての力を身につけたいという思いであると説明している。また、‘他者への思い’は、仕事上の相手に喜んでもらいたい、相手と信頼関係を築きたい、社会の役に立ちたいという思いであり、「つながり」は、職場内外を含めた人間関係や職場環境を示しているとしている。

本研究における社会人学生の経験学習の様相についてより詳細に検討するために、表2の局面IIIと局面IVに属するカテゴリーのうち、自分自身の生涯学習についての認識である「社会人の時期における学びの意義」を除いた7カテゴリーに属するコードを用いて、‘自分への思い’と‘他者への思い’‘つながり’に関係すると考えられるコードを再分類した(表3)。

表3 内省的観察と抽象的概念化に属するコードの再分類

	局面Ⅲ	局面Ⅳ
自分への思い	現場は教科書通りの手技とは違う(i-2)	基礎的医学的な知識を覚えるのが大変(l-3) 勉強や規則が厳しいので中途半端な気持ちでは続かない(l-4) 医学的知識と看護が2年目でつながる(l-6) 勉強に面白さを感じて興味が出てきた(m-1) 正確な手技を身につけるためには基本を学んでおく(n-1) 命に係わる責任が重いので知識や手技を身につける(n-2) 看護の理論や本質よりも技術習得に重点を置く(n-3) 看護師の手技が気になって注目した(n-4) 看護技術をきちんと身につけられるか不安(n-5)
他者への思い	学校で学ぶ患者へのケアと現場のやり方が違う(i-1) 看護の現場は業務に追われている感じで患者に寄り添えない(i-4) だんだんと看護師として患者をみるようになった(k-2) 看護師としても患者のペースを尊重する姿勢をもつ(k-3) 看護師として個々の患者に寄り添う姿勢をもつ(k-4) 患者に対する姿勢を内省する(k-5) 患者への関わり方と仕事のスピードの折り合い(k-7)	看護の考え方を患者に伝えるのが難しいと感じる(l-5) 技術は必要だがその基本は信頼関係(o-1) 手技だけでなく尊厳を大事にしたい(o-2) 患者に対して安心できる環境を提供する(o-3) 忙しくても自分の気持ちを乱さないようにコントロールする(o-4)
つながり	意に沿わない現実反面教師として割り切る(i-3) アルバイト先では自分の役割に疑問がわく(i-5) 看護の仕事をやれるという見通しがつく(j-1) 社会人に対して現場の職員は後押ししてくれる(j-2) アルバイト先の実習だと勤務のような感覚がある(j-3) 准看と正看の学生に対して現場の態度が違う(j-4) 看護師への質問の内容とタイミングに気を使う(j-5) 看護師の業務が理解できた(k-1) 忙しい環境では判断力が大事(k-6)	看護は扱う情報量が多いし知識と技術が必要(l-1) 看護は新しいことを一から学ぶイメージ(l-2) 看護は病態から考えるので介護とは視点が違う(m-2) 根拠に基づいて考えることが重要(m-3) 領域によって異なる清潔不潔の扱いに戸惑い(n-6)

()はコード記号

1) 自分への思い

局面Ⅲと局面Ⅳに属する (i-2) (n-1) (n-2) (n-3) (n-4) (n-5) の6つのコードには〈手技〉あるいは〈技術〉というキーワードが含まれている。このことは、看護師として一人前になるため

には看護技術の習得が不可欠であり、学びの第一義的な目標もここに置かれていると考えられる。つまり、准看護学生のもつ仕事の信念について、「自分への思い」の内容は、【看護技術の習得を希求する】という特徴を示している。

2) 他者への思い

看護職にとって仕事上での重要な他者は患者である。この患者に対する思いについて、局面Ⅲに属するコードをみると、(k-2) (k-3) (k-4) のコードにあるように〈看護師として〉という表現が含まれている。つまり、専門職である立場を確立した上で対象者である患者に向き合おうとしていると捉える事が出来る。そのうえで、局面Ⅳにあるように患者との関係において〈信頼関係 (o-1)〉、〈尊厳 (o-2)〉、〈安心 (o-3)〉を大事にしたいという意識につながっていると考えられる。つまり、准看護学生の仕事の信念の構成要素である「他者への思い」は、【看護職としての立場から患者に向き合う】という特徴を持つと考えられる。

3) つながり

局面Ⅲに属するコードは、勤労学生として、あるいは実習生として医療現場に入った時に、学生の目を通して捉えた現場の実態、およびその環境と自分の存在との関係、それを自分の中でどのように位置付けていくかという内容を示している。そして、局面Ⅳに属するコードにおいて、看護は〈病態 (m-2)〉あるいは〈根拠 (m-3)〉に基づいて考えるために、基礎的・医学的な知識が必要(1-1, 1-2)であるというように、看護という仕事の特徴を意識化していると思われる。つまり、医療という科学的な根拠に基づいた実践 (evidence based medicine: EBM) を行うべきであるという価値観をもつ職場であるゆえに、その価値観や理念を念頭に置いた自分の仕事の信念を形成していることから、【EBMを重視する環境で看護の特質を意識化する】と特徴づけられる。

4) 准看護学生の経験学習の特徴

以上のように、准看護学生の経験学習のプロセスにおける局面Ⅲと局面Ⅳの「自分への思い」「他者への思い」「つながり」については、それぞれ【看護技術の習得を希求する】、【看護職とし

ての立場から患者に向き合う】、【EBMを重視する環境で看護の特質を意識化する】としてまとめることができた。

局面Ⅲは、看護についての学習や勤労学生としての職場における経験、あるいは実習での経験などの今まで体験していない新しい経験について、自分の価値観や社会経験等に基づいて色々な観点から振り返りつつ意味づけようとしており、これはKolbの経験学習における「内省的観察」に該当すると考えられる。

局面Ⅳは、看護職としての立ち位置を意識しつつ、看護という仕事にとって大事にすべきことは何か、自分がどのように看護を実践していくべきかについて考えを固めようとしており、この段階はKolbのいう「抽象的概念化」に該当すると考えられる。

5) 准看護学生のもつ仕事に対する思いの特徴

本研究において明らかになった准看護学生のもつ仕事に対する思いについて、介護福祉を学ぶ社会人学生への調査結果(宮上・田中 2015)や、松尾(2006)による一般企業に勤務する職業人の持つ仕事の信念と比較検討を行う。

働きながら介護福祉士資格取得を目指す社会人学生を対象とした研究結果においては、「仕事に対する思い」や「利用者に対する思い」の中で、技術習得についてのコードは非常に少なく、むしろ利用者の主体性や尊厳を大事にしたいが、そのために具体的な実践がどうあるべきかという理念と実践の統合に苦勞している姿があった(宮上・田中 2015)。これは、「根拠に基づいた実践」という理念はあっても、理念と介護実践をつなぐ具体的なケアの方法論が確立していない介護現場の特徴を反映していると考えられる。

一方、准看護学生は、対象者である患者の状態を理解しようとする際に、看護は病態から根拠に基づいて考えるので、基礎的な知識と考え方のプロセスを習得することが必要であると認識しており、これは【EBMを重視する環境で看護の特質

を意識化する】と表現したように、医学のプロセスが科学的で明確であるという前提があるためと考えられる

また、松尾（2006）は、不動産営業担当者、自動車販売会社の営業職、ITコーディネーターという分野が異なる一般企業の社員を対象として仕事の信念に関する研究を実施しており、いずれも「顧客志向」と「目標達成志向」という二つの要因を見出している。例えば、不動産営業担当者の「顧客志向の信念」には、「顧客のために誠心誠意をつくす」「顧客に信頼されるように努力する」などの項目があり、「目標達成志向」の中には、「稼ごうとする意識を重視する」「数字を上げる気持ちの強さが大事」などの項目がある。一般企業においては、利益の追求が求められることから、目標達成志向は数値で表現される具体的な目標値として示されている。

医療・福祉分野においては、一般企業のように明確に数値で示される外的な評価基準である利益の追求ではなく、「ケアの質向上」であったり、そのための「専門職としての技術の確実性」「職員としての力量」というような、職員の内的な評価を含む基準があると考えられる。このことが、人を対象としてケアに関わる準専門職の仕事の信念の形成に影響し、特徴として現れているのではないだろうか。

VI まとめと今後の課題

本研究は、人をケアする準専門職の例として准看護師を取り上げ、介護分野での職業経験をもつ社会人学生に対して調査を行ったものである。分析にあたっては、Kolbの経験学習論に基づき、看護を学ぶという新しい経験が、社会人学生の「仕事の信念」にどのように影響しているのかを質的記述的に検討した。

調査結果から明らかになった准看護学生の経験学習のプロセスは、Kolbの経験学習サイクルと同様に、5つの局面をもつらせん状のサイクルとして示された。

また、准看護学生の仕事に対する思いは、【看護技術の習得を希求する】、【看護職としての立場から患者に向き合う】、【EBMを重視する環境で看護の特質を意識化する】と表現できる特徴があった。そして、准看護学生は、対象者である患者の状態を理解しようとする際に、看護は病態から根拠に基づいて考えるので、基礎的な知識と考え方のプロセスを習得することが必要であると認識していた。

ただし、准看護学生は1年生と2年生の調査であるため、本研究で明らかになった結果は、あくまで学生の立場として考える仕事に対する思いであり、養成校卒業後に医療現場で働く際の「仕事の信念」はどのような内容を示すのかについては明らかになっていない。この点については、今後の継続的な調査が必要である。

なお、本研究はJSPS科研費（26381139）を受けて実施した調査の一部である。

文献

- Kolb, David A. (2014) Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development Second Edition, Pearson FT Press.
- 河野由佳（2014）「准看護師教育の技術項目と卒業時の習得状況の実態調査」『看護教育研究集録』40, 32-39.
- 松尾睦（2006）『経験からの学習—プロフェッショナルへの成長プロセス』同文館出版。
- 松尾睦（2011）『職場が生きる人が育つ「経験学習」入門』ダイヤモンド社。
- 宮上多加子（2012）「離職者を対象とした介護福祉士養成教育における社会人学生の認識—学びの経験に関する個別面接調査に基づく分析—」『介護福祉教育』17（2）, 98-106.
- 宮上多加子・田中眞希（2013）「介護福祉士養成教育における社会人学生の学びのプロセス—離

- 職者訓練生と介護雇用プログラム生の学年による変化」『中国・四国社会福祉研究』2, 13-29.
- 宮上多加子・田中眞希 (2014)「離職者を対象とした介護福祉士養成事業修了生の介護に対する認識と仕事の信念」『高知県立大学紀要社会福祉学部編』63, 153-163.
- 宮上多加子・田中眞希 (2015)「介護雇用プログラム生の学びと仕事に対する思い—面接調査による3年間の変化の分析—」『高知県立大学紀要社会福祉学部編』64, 1-16.
- 佐藤郁哉 (2008)『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社.
- 田中眞希・宮上多加子 (2015)「准看護師養成校で学ぶ社会人の学習や仕事に関する認識と職業経験の影響」『高知県立大学紀要社会福祉学部編』64, 61-72.
- 谷口智彦 (2006)『マネジャーのキャリアと学習コンテキスト・アプローチによる仕事経験分析』白桃書房.
- 横山 裕 (2011)「介護職員のキャリアパス提示モデルの比較検討：介護職員処遇改善交付金制度における介護福祉士の位置づけ」『九州保健福祉大学研究紀要』12, 45-55.